
「曾我物語図屏風」の展開
——富士巻狩・夜討図から富士巻狩図へ——

小口康仁(学習院大学)

「曾我物語図屏風」は、斉藤研一氏の「曾我物語図屏風作品一覧」(「〈曾我物語〉の絵画化と文化環境—物語絵・出版・地域社会」, 2016)によると現存37点あり、そのうち最も早期の作例は、土佐光吉筆といわれる作品(鳥取・渡辺美術館所蔵)である。この《渡辺美術館本》は、右隻に建久4年5月28日源頼朝による富士裾野で行なわれた巻狩の様子を、左隻にその夜曾我十郎祐成と五郎時致の兄弟が、実父の敵である工藤祐経を討ちとり悲願を成就する様子を描くもので、以降17世紀の作例には、この構成を踏襲したものが多い。

ところが江戸中期以降の作例になるにつれて、「富士巻狩図」隻のみの伝来、もしくは「富士巻狩」の主題だけで一双を構成する作例が増え、「夜討図」排除の傾向が見え始める。たとえば、斉藤氏が17世紀末以降の作品とする16点中、夜討モチーフを描くものは5点しかなく、17世紀の最盛期と比べてその制作数は激減している。この時期は、武家諸法度における「文武弓馬の道」から「文武忠孝を励し」の文言改訂からも読み取れるように、武断政治から文治政治への転換期であった。

『曾我物語』は武家好みの主題であり、中でも夜討のエピソードは文武忠孝の称揚に相応しい政事に則した格好の題材であったはずである。そこには、兄弟の実父への「孝」の精神や、物語の筋に則して展開する中に、仇討ちに同行できなければ切腹すると「忠」を示す従者たちを、兄弟が宥め説得する場面も見られる。後者は、徳川四代将軍家綱による殉死の禁止に通ずるとも言えよう。

それでは、なぜ夜討モチーフが以前のように描かれなくなったのか。発表者は、赤穂事件を典型とする17世紀後半から18世紀前半にかけて起きた「忠孝」を掲げた仇討ち事件との関連を考えたい。赤穂事件は、武家諸法度で奨励している「忠孝」を掲げて起きたことから、幕府は苦渋の決断を迫られることとなった。一方、主君の仇を討つことが泰平の世において仕官する手段のひとつとなった事例もある。こういった時代背景と「夜討図」排除の傾向は、少なからず関係していると考えたい。

一方で、「富士巻狩図」に関しては、その後も絵画化され続け、一双に「富士巻狩」を展開させる作例も珍しくない。その背景には、徳川吉宗以降に小金原で行なわれた大規模な鹿狩りが影響していると考察したい。富士巻狩のモチーフは、『曾我物語』のフレームを残しつつも、同じ東国に政権を樹立した源頼朝に徳川将軍を重ね合わせる、すなわち徳川将軍家の権威表象として制作され続けたのではなかろうか。

以上のように、本発表では、「富士巻狩図」と「夜討図」によって構成されていた「曾我物語図屏風」が、夜討モチーフが排除された「富士巻狩図屏風」へと展開していくことを、時代背景の面から解析していく。